Ⅳ　国語　３年次の成果と課題

１　成果

(1)　言葉に関する疑問を基にした学習問題の設定と単元構成

学習問題をつくるための「見方・考え方」を明確にして，子どもと共に単元計画を立てる学習を積み重ねたことで，子どもの単元を見通す気付きの質が高まってきたことや自分の「問い」を解決するために主体的に学習に向かう姿が見られたことが成果である。

２年生「つなげて読もう～わたしはおねえさん～」では，「普通ならばしないのに」という叙述に着目する「見方・考え方」を使うことで，主題に関わる叙述に着目して学習問題をつくり，それを解決するための学習計画を立てることができた。４年生「読者の心が動くしかけを見つけよう～あめ玉～」では，初発の感想で多くの子どもが感じた「なぜ読み手はこんなにもはらはらしてしまうのか」ということを取り上げて学習問題をつくり，単元を通して作者の書き方の工夫や効果を考えることができた。自分たちの中から生まれた必然性のある「問い」であったことが，学習を自分事として捉え，単元を通して主体的に学び続ける姿につながった。

(2)　言葉と言葉を関係付けて考えたり，既習を活かして考えたりする場の設定

子どもの「分かったつもり」を揺さぶり，新たな視点を与える「問い返し」により，子どもたちがもう一度本文の叙述に戻り，はっきりとは見えていなかった言葉と言葉のつながりや言葉の意味に気付くことで，自らの読みを更新していく姿が見られたことが成果である。授業の序盤で出される多様な考えを整理・共有することで子どもたちは現時点での自分の読みを認識する。そこからねらいに迫る焦点化された「問い返し」をすることが，これまでの自分の読みを省察しながら繰り返し叙述と向き合い，読みを深めていく子どもたちの姿につながったと考える。

また，２年生では，国語科の学習ノートを「物語ノート」「説明文ノート」「作文・言語ノート」の３冊に分けて学習を進めた。単元に入る際，どのノートを使うとよいのか，物語文と説明文，言語事項の違いについて子どもたちが口々に説明する姿が見られた。これからどのような学習をするのか，領域や文種の違いによる学びの系統性を子ども自身が意識して単元の学習を見通すことにつながったと考える。領域ごとに既習内容を自覚し，活用することで，複数の文章と比較して読んだり，これまでに蓄積してきた「見方・考え方」を選択して使ったりするなど，単元を越えて学びをつなげる子どもたちの姿を引き出すことができたことも成果である。

２　課題　**子ども同士が問い返し，言葉に関する学びを深めていくための手立て**

よりよい言葉の解釈や表現に向けて子ども同士が問い返し，学びを深めていく力を高めることが課題である。

協働的な学びの中で，互いの考えに共感し，受け止めるだけではなく，それが妥当であるのか吟味し，問い返して練り合うことにより，考えの修正や再構成が促され，深い学びとなっていく。単元や一単位時間の中で，子ども同士が問いをつなげながら，協働して学びを深めていくための手立てを探っていきたい。